

弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org

六月になりました。梅雨の季節です。くれぐれもご自愛ください。

一昨年から「尾張名古屋・歴史街道を行く―杜寺城郭・幕末史―」をお送っていますが、今年も名古屋城と名古屋城下町をお送りします。今月は軍都名古屋です。

★庄内川・堀川・荒子川・笈瀬川・江川

名古屋城と城下町は西からの豊臣勢の進軍、攻撃に備えて造られました。

西国大名を中心とする豊臣方が東進してきた場合、名古屋城は重要な軍事拠点になります。名古屋城の北西側を防衛線として意識し、**庄内川**を天然の堀に見立て、縄張り、築城、城下町形成が行われました。

城下町西を南下する庄内川の東、つまり城下町の西には**堀川**が開削されました。堀川は名古屋城と海を結ぶ水運路であるとともに、城下町防衛のための堀でもあります。

さらに、庄内川と堀川の間には、西から**荒子川**、**笈瀬川**、**江川**の三河川があり、これも防衛線に寄与します。



庄内川から三河川を経て堀川に至るこの地域は広大な田園地帯であり、村が散在していました。名古屋城及び城下の大寺院の屋根から見晴らしがきき、敵勢の進軍の様子が一望に見えます。村々は堀川に至る過程で戦いの拠点にもなり、よく考えられた配置です。

庄内川を渡河する場合、橋が架かっているのは**美濃街道**だけです。つまり、庄内川に架かる美濃街道の**枇杷島橋**を崩落させれば、西から来る敵勢を足止めすることができ、敵は渡河するしかありません。

★西寺町・東寺町・南寺町

庄内川、三河川、堀川を越えて城下町に侵入された場合、城とともに、**西寺町**、**東寺町**、**南寺町**が防衛拠点になります。

枇杷島橋と城下町の間にある**西寺町**は最初の防衛拠点です。

城下から東に撤退する場合、それを追う敵を**東寺町**で迎え撃ちます。

東寺町も突破されれば、**岡崎街道**、**駿河街道**を通じて後退することを企図してました。

南下する敵勢は**南寺町**が迎え撃ちます。南寺町も陥落した場合は、熱田、宮宿まで撤退し、**東海道**と海路による退却が可能です。

よく考えて構築された名古屋城の城下町ですが、その骨格を形成した

のは城下の道、及び周縁部とつながる街道です。

東西十二通、**南北十筋**の道が碁盤割を形成していましたが、南北は**本町通**、東西は城郭のすぐ南を通る**京町筋**と碁盤割の中央を横切る**伝馬町筋**が中心です。本町通と伝馬町筋の交差点は**札の辻**です。

京町筋の西端から枇杷島に向かつて庄内川を渡河するのが**美濃街道**です。

京町筋を建中寺角から北に向かうのが**下街道(善光寺街道)**。大曾根を経由して犬山、美濃方面に向かう北の撤退路です。

札の辻から南東方向へ向かう**飯田街道**もありました。飯田街道は途中で分岐。岡崎に向かう**駿河街道**、**岡崎街道**は撤退路です。東海道經由よりも直線的かつ短時間で岡崎に至ります。

名古屋城と**宮宿**をつなぐ南北の幹線道は本町通です。本町通を南下して途中から西に向かうのが**佐屋街道**、**熱田**からさらに南下して東に向かうのは**東海道**です。佐屋街道は美濃街道と同じく、攻め上られた時には封鎖の対象です。

このように、碁盤割の東南北は主要街道とつながり、西は豊臣方との戦を考慮して城下町が形成されました。

★八事興正寺の深層

八事一帯の山々は御付家老ほか重臣たちの「**控え山**」として配されました。名目上は薪炭確保のために使われる山ですが、戦時には各家臣が山々に籠ることを想定していたと考えられます。

八事興正寺が創建されたのは一六

八八年。既に豊臣が滅んで半世紀以上経ち、幕藩体制が確立した頃です。実は、尾張藩祖**義直**(在位一六〇七〜一六五〇年)、二代藩主**光友**(同一六五〇〜一六九三年)と、三代將軍**家光**(同一六二三〜一六五一年)、四代將軍**家綱**(同一六五二〜一六八〇年)は緊張関係にあったと言われます。

義直、光友は神君家康公の子、孫である一方、家光、家綱は孫と曾孫です。尾張藩主は將軍よりも神君の血統が濃いことや、義直は大坂の陣にも参戦した最後の戦国武將であり、將軍家に対しても臆することはありませんでした。

家光が二度の上洛時に名古屋城の叔父義直のもとに挨拶に行かなかつたこともあり、一六三五年、家光が**参勤交代**を命じた折に義直もなかなか江戸に行きませんでした。ようやく登城した義直に対して、家光は「鳴海表まで迎えに参ろうかと思ひ候」と言ったと伝わります。

將軍が鳴海表まで迎えに行くというのは、軍勢を引き連れて攻め込むことを意味してました。義直と家光は三歳違い。徳川家の主導権を巡って緊張関係にあったことが伺えます。八事興正寺の創建、八事「控え山」への家臣の配置等々は、実は幕府軍西進、つまり將軍家と尾張藩が戦になった場合の備えだったとの見方もあります。

★武家地と建中寺

名古屋城下町は、河川、街道、寺町だけでなく、武家地も計画的に配置されました。来月は**武家地と建中寺**です。乞ご期待。